

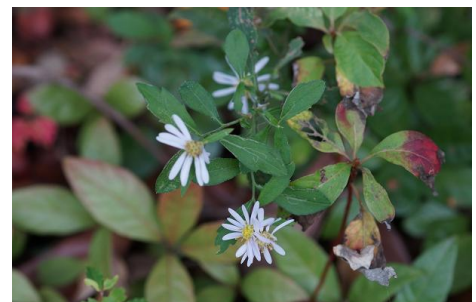
＜雨上がりの夕＞日が沈む直前になって西の方から雲が次第に薄くなり姿を見せた富士山です。頂に湧き立つ雲は日を背にして暗く、夕日に映える上空の雲とは対照的です。また雲の下には積もった雪がほの明かりの中でうっすらと見えています。ところがほんの20分ほどの間に頂の雲も吹き払われ富士の姿はシルエットのみになってしまいました。



＜寒気到来＞夏の暑さに押しやられて秋が短いような気がしておりましたが、それに加えてつい数日前には早くも霜が降りました。ビオトープではガマやミソハギが早々と枯れてしまいました。その一方で頑張っている草花もあります。背丈が20cm足らずのジュウリョウ（常緑低木）に交じってノギクが数輪咲いているのに気付きました。花びらは不ぞろいで色も薄くやっとなんか生き延びたという感じがします。かつては野辺に一杯咲いていたものなのですが。



＜霜にも負けず＞ギボウシは今では実を付けた茎だけの姿になっています。その大きな葉が枯れてなくなったあたりにリンドウが咲きだしました。日当たりが良くなかったのか背が低いのですが蕾はしっかりと付いています。この花は明るい光が好きなので日が差す時だけ開いています。一方で霜には強そうですね。枕草子には「りんどうは.....こと花みな霜枯れはてたるに、いと花やかなる色あいにて.....」と記されています。ところでリンドウは漢字で“竜胆”と書き、これが訛ってリンドウとなったとのこと。リンドウの根は胃薬などとして使われてきましたが、その苦さたるや“熊の胆（くまのい）”の比ではないということで“竜の胆（きも）”という立派な名になったそうです。



＜ノギク(ヨメナ)＞

＜静寂の中＞ビオトープには人声も小鳥のさえずりも



しない静かな昼下がりが

あります。そんな中で



＜リンドウ＞

よく聞こえるのは“ポトツ、ポトツ”と枝から落ちてきたドングリが地面を打つ音です。左はNo.8でふれたヤマイモのむかごの写真です。むかごも時期が来ると自然に茎から離れて地面に落ちますが、やはり“ポトツ、ポトツ”という音が静寂の中で聞こえそうです。（文と写真：松本正勝）